

不感症の私が、イキまくるなんて……こんなの初めて♡

（隠れドSな高校の後輩に、甘く激しく責められちゃいました）

「先輩、ほら、まーたイッてる。やらしいね♡」

くすつとした笑い声が耳に落ちる。

違う、そんなことない——そう言い張りたいのに。早川の指が私の一番奥をくちゆくちゆと責め立て、私に否定することを許さない。

「不感症なんて嘘なんでしょ？　こんなに濡れてるよ？」

知らない。こんなの知らない。これまで感じたことのない感覚が身体を勝手に支配していく。

「元カレ、よっぽど下手くそだったんじゃない？」

どこか挑発的な言葉。否定したいのに、与えられ続ける刺激に翻

弄され、口にしようとした言葉が喉の奥に溶けていく。

「今日は俺で、いっぱい気持ちよくなって下さいね♡」

もうずっと気持ちいいのがとまんない。私はもう、何も考えられなかった。

私には、人に言えない悩みがある。

二十五歳にもなって、恋愛がまともにできないこと。

別に、今まで恋人がいなかったわけではない。

新しく出会って、好きになって、どちらからか告白して、恋人に

なって——人並みに恋愛をしてきたつもりだ。

それなのに——。

いざ相手と深い関係になろうとすると、いつも同じ壁にぶつかってしまふ。

好きなはずなのに。隣にいと落ち着くし、この人と一緒にいた
いつて思ってるはずなのに。

なのに、肝心な場面になると——まるで身体だけが取り残された
みたいに、何も感じなくなってしまうのだ。

（どうして？ どうしてエッチが気持ち良くないの……？）
変だってことくらい、私がいちばんよくわかってる。

不安になって、雑誌もネットも読みあさった。

緊張してるだけ。回数重ねれば平気。大事なのはテクニックより
相手への気持ち。

でも、そこに書いてある“当たり前”は、どうしても私には起こらなかった。

無理にうまくやろうとするほど、空回りして、余計にぎこちなくなる。

気持ち良くならなきゃ。そう思えば思うほどに、うまくいかない。心の中の焦りからか、行為の時に濡れなくなってきた、そうすると気持ちいいどころか、ついには痛みさえ感じるようになってしまふ。

きっと、向こうにも伝わってたんだと思う。

最初のうちは、気持ちいいふりをしていても、明らかに濡れていない私の秘部を見て、やがて恋人は気付いてしまうのだ。

「気持ちよくなかった？」

そう不安げに聞かれて、何度も嘘を吐いた。

けれど、そんな拙い嘘は、長くは続かない。

身体が全く反応していないことですぐにバレてしまう。

そうして、どんどん気まずくなっていって――

そして、決まっって最後は――

「……不感症なんじゃない？」

最近別れた恋人も、困ったようにそう言って去っていった。

責めるような口調ではなかったのに、その一言が胸に深く刺さって、私はしばらく落ち込んだ。

何度目かも分からない別れ。いつも同じ理由。

（なんで？ どうしていつまでも気持ちよくならないの？ 私が悪いの……？）

その問いかけに対する答えを、私は今でも持っていない。

このままじゃだめだって、さすがに私でも思った。

——それでも、多少の努力はしたのだ。慣れようと、大人のおもちゃで自分を慰めてみたりもした。でも……効果は全くなし。

（もう、当分は恋愛なんてしないでいいかな……）

ついに、最近はそう思うようまでになっていた。

無理に誰かを好きにならなくてもいい。

私みたいに恋愛がうまくいかない人間もいるのだと、そう思い込めば、少しだけ楽になれる気がしたから。

期待しなければ、傷つかずにすむ。

そう言い聞かせながら、それでも夜になると、胸の奥がちくりと疼く。

（本当は——）

誰かときちんと向き合って、心も身体も重なり合い、満たされるような恋愛をしてみたい。

（できれば、エッチの気持ちよさを知ってみたい……!）
そんなささやかな願いを、今もまだ捨てきれずにいるのだ。

そんなある日。

私は、ほとんど勢いだけで、高校時代の部活の同窓会に参加して
しまった。

本当は行くつもりなんてなかった。

大学は地方だったし、就職してから何度も断ってきたのに。

でもその日は、どうしても一人で家にいる気になれなくて。

駅前の居酒屋の二階。

ふすまを開けた瞬間、懐かしい笑い声とにぎやかな空気に包まれて、私は少しだけ足がすくんだ。

「あ!!」

入り口で立ち尽くす私を仲の良かった数人が見つけ、声をかけてくれる。

「え、卒業式ぶりじゃ〜ん!」

すぐに懐かしい顔ぶれがわらわらと集まってきて、私はほっと息をついた。

ひととおり挨拶を済ませて、私は自然と壁際の席に腰を下ろす。

「久しぶりすぎだろ〜」と、先輩や同期に代わる代わるグラスを差し出され、そのたびに断れず、気づけば思った以上に飲んでしまっ

ていた。

みんなの楽しそうな笑い声を聞いているだけで、暗い気持ちが払拭されていく。

（来てよかった……）

そう心から思っていると、ふと視線を感じたような気がして顔を上げた。

会場の向こう側、ひときわ人だかりができているテーブルがある。その中心にいたのは――

（……早川？）

バレーボール部の一つ下の後輩、早川春翔だった。

周りを囲んでいるのは、同期の男子や、華やかな雰囲気のエースプレイヤーたち。

今や世界で活躍するプロ選手なのだから、注目を集めるのは当然

だろう。

（すごい人気……まあ、そりゃそうだよね）

テレビで見る姿より、生で見る早川はずっと大人びていて、でも人懐っこい笑顔は昔のまま。

私は遠くから眺めながら、少しだけ懐かしい気持ちになった。

——その時だった。

「ねえ早川先輩、あっちの席来てくださいよー？」

綺麗な女の子が、早川の腕に手を添えながら話しかけているのが見えた。見覚えがないので、私が卒業してから入部してきた子だろう。

モデルみたいなスタイルの子だ。隣にいる男子たちが「おお」とはやし立てている。

「早川、いいじゃん。学年一可愛かった子だぞ！」

「行ってこいよ」

周囲が冷やかすように促している。

でも、早川は困ったように笑って首を横に振った。

「いや、俺はいいよ」

「えー、なんでよ」

「ごめんね。今日はちよつと……」

その言葉に、女の子は少し残念そうな顔をしていた。

なんとなくその様子を目で追っている——ふいに、早川と目が合った。

一瞬だけ。目が合ったと思ったら、また別の男子に呼ばれてそっちを向いてしまった。

でも確かに、早川はこちらを見て、ふっと表情を緩めたように見えた。

(……気のせい?)

そう思っていると、すぐに聞き覚えのある声が降ってきた。

「先輩、お久しぶりです!」

驚いて顔を上げると、さっきまで向こうにいたはずの早川が、すぐ目の前に立っていた。

「うん、久しぶりだね」

「やっと会えた」

心なしか目がきらきらと輝いているように見える。

(……やっと?)

その言葉が少し引かかったけれど、深く考える前に早川が「ここ、いいですか?」と聞いて、返事をする前に私の隣の席を陣取った。

「……海外にいるって聞いたよ?」

「休暇中で帰国してたんです！」

「すごい活躍だね。この前もテレビで試合見たよ」

「ありがとうございます！」

高校時代から、早川は部の中でも目立つ選手だった。

一年生の頃から強豪校のレギュラーで、試合になると必ず名前が挙がるような存在。

私はマネージャーとして特別なことをしていたわけじゃないけれど、早川とはなぜか言葉を交わす機会が多かった。

人懐っこいこの後輩は、気づくといつも近くにいて、人見知りのきらいがある私にも何かと声をかけてきてくれた。

（懐かしいなあ……でも、そんな早川も今はプロの選手かあ）

卒業後すぐに海外リーグに挑戦したと聞いたときは、「やっぱりね」と思ったものだ。

それから数年経って、今ではすっかり『海外で活躍する日本人選手』として、テレビや雑誌でも割と頻繁に名前を見るようになって
いる。

そんな——いまや私にとっては遠い存在となっていた早川春翔が
目の前にいる。

こちらをにこにこ見つめてくるその表情に、懐かしさが込み上げる。

「……早川、学生時代と変わんないね」

「先輩こそ、あいかわらず可愛い」

早川の言葉に私は思わず苦笑する。

「でもちよっとチャラくなった……？
昔の可愛い早川は絶対そんなこと言わなかったよ？」

「ずっと心の中では思っていましたよ」

「嘘！」

「マジですって」

（うーん……これは絶対遊んでるなあ。さつきも可愛い子に誘われてたのに断ってたし……本命が別にいるのかな。まあ、職業柄信じられないくらいモテるだろうし……うう、あの早川が……なんかシヨック……）

「先輩信じてないでしょ？」

「はいはい、信じますよー」

「絶対信じてないでしょ、それ。……先輩は昔っからこうだからなあ」

軽口をたたきながら、早川は自分のお酒に手を伸ばす。いい飲みっぷりだった。

「……先輩のほうはお元気でした？」

「うん、おかげさまで。そこそこ元気にやってるよ」

「そこそこっすか？」

「うん、そこそこ」

ふと、元彼の顔が浮かんでくる。すごく元氣と答えてしまうと嘘になるから、そこそこ。

「ずっと同窓会参加してなかったですよね？」

「うん。大学は地方だったし、こっち戻ってからもなかなか予定合わなくて」

私がそう言うと、早川は何かを言いたげに口をつぐんだ。

「早川……？」

「……俺……ずっと先輩に会いたかったです」

どこか真剣味を帯びた声音に、私は一瞬だけ息を呑んだ。

「……もう、さっきからそんなことばかり。からかわないで」

そう返しながら、私はなんだか恥ずかしくなってきたのを誤魔化すようにグラスを傾ける。

（きっと、誰にでもこんなふうと言ってるのよ……）

そう思うと、なんだかそわそわとしていた心が落ち着いてくる。自分だけに向けられているものでないのなら、自意識過剰になる必要もない。

（……それにしても、早川ってちゃんと“大人の男の人”になってるんだもんなあ）

少しだけ寂しくはあるが、可愛い後輩の成長に自然と頬が緩んだ。「先輩……？」

早川が不思議そうに、じっと私の目を覗き込んでくる。

彼の整った顔立ちが至近距離にあることに気が付き、せっかくの落ち着いた心がまた落ち着きを失いそうになる。うまく動揺を隠せ

ないような気がして、私はグラスに口をつけた。

(……だーかーらー、意識しすぎなんだって。うー、なんか久々すぎて調子狂う……)

「先輩、そんな一気にあおると酔っちゃうよ？」

どこか心配そうな早川に、何か返さなきやと思っていると――

「よう、早川！ いつの間にかいなくなってるも思ったらやっぱここかよー」

「わかってんなら邪魔すんなよ」

「俺らの代のエースなんだからこっちのテーブルにも顔出せよな」

「……ちえ。先輩、また後で。飲みすぎちゃダメですよ？」

「うん、気をつけるね」

(……助かった)

恋人と別れたばかりだからって、久しぶりに会った後輩をこんな

ふうを意識しちゃうなんて……さすがに浮かれすぎだと反省する。

（……まあ、仕方ないか。早川、カッコよくなってるだもん）

注意されたばかりだというのに、私はまたグラスに手を伸ばした。

楽しい時間は本当にあつという間で、お開きの時間がやってきた。

「……もうこんな時間なんだ」

名残惜しい空気の中、三々五々、席を立つ準備が始まった。

「先輩、二次会どうします？」

帰り支度をしていた私の隣で、早川が少しだけ距離を詰めてそう

尋ねてくる。

「……私は帰るつもり」

「えー、先輩来ないんすか？」

「うん。今住んでるところ、ちょっと遠いし」

二次会まで参加すると、終電を逃してしまいそうだ。そう思うと、自然とブレーキがかかる。

「……それなら、俺と少しだけ飲み直しません？」

そう言われた瞬間、胸の奥が小さく跳ねた。

（……早川と二人で……？）

久しぶりに会った後輩に誘われて、さっきまでは帰ろうと決めていた心が揺らぐ。

このまま何も日常に戻ってしまうのが、なぜだか少しだけ寂しい気がする。

私は、自分でも理由をうまく説明できないまま、小さく頷いてしまった。

「……うん、いいよ」

二人は同窓会の店を出て、夜の空気に包まれながら並んで歩いた。

「……なんか、変な感じっすね」

「変？」

「うん。こうして先輩と二人で歩いてるの」

「……確かに。久しぶりだもんね」

「久しぶり、ってだけでもないっていうか」

「……なに、それ」

私が思わず笑うと、早川は一瞬だけ困ったように目を細めた。

「いや……なんでもないです」

そう言ったのに、歩く速さが少しだけ落ちる。

何か言いたげに口を開きかけて、結局、飲み込むみたいに黙り込んだ。

「……早川？」

不思議に思って呼びかけると、早川は遅れて小さく笑った。

「……何でもないです」

そう言っ、早川はもう一度目を細めて小さく笑ったあと、何かを考え込むように黙り込んでしまった。

（……どうしたんだろ？）

少し歩いた先にあるホテルの地下のバーに入ると、店内は落ち着いた照明と静かな音楽に満ちていた。

「こういうところ、よく来るの？」

「たまに。休暇中はこういうところじゃないと、逆に落ち着かなくて」
（……そっか。有名人は気軽にお店も選べないんだ）

そういえば、さっきの居酒屋でも知らない人にサインを求められていたみたいだった。

（あんな感じじゃ、どこ行っても気が休まらないだろうな）

カウンターに並んで座り、早川がおすすめしてくれたカクテルを注文した。

ほどなくして運ばれてきたのは、淡いピンク色にきらきらとした氷が浮かぶ、甘い香りのグラス。縁には薄くスライスされたオレンジが飾られていて、見ているだけで少し気分が上がる。

軽くグラスを合わせて、一口含んだ瞬間――

（おいし……ッ♡）

思わずそう叫びかけて、私は慌てて飲み込んだ。

あまりはしゃいでいるように思われるのが恥ずかしかったからだ。

「どうですか？」

「うん。すごく好きな味」

そう無難に答えると、早川は少しだけ安心したように息を吐いた。

「よかった。昔、先輩甘いの好きって言ってたから」

その言葉に胸が少しだけ高鳴った。覚えてくれたことが素直に嬉しかった。

「……覚えててくれたんだ」

「俺が先輩に関すること、忘れるわけじゃないじゃないですか」

（まーた、そんなこと言う……）

「……やっぱり……早川チャラくなったよ」

「……先輩限定っすよ？」

からかうような口調なのに、どうしてか視線だけをふいつと逸らされた。

心なしか頼ったが少し赤くなっている気がする。

（なんで言った本人がちょっと照れてんのよ……？）

無意識にじっと見つめてしまっていたらしい。早川は「先輩、見過ぎ」と余計にそっぽ向いてしまった。

（……高校の時の早川も割と照れ屋だったよね）

懐かしくなって、思わず吹き出してしまう。

「……先輩、酔ってます？」

「え？」

「顔赤い」

「ほんと？」

「ほら」

そう言って伸びてきた指先が、頬のすぐ手前で、ためらうみたい
に止まる。

触れられてもいないのに、なぜだか顔がより一層熱くなっていく
のが自分でもわかる。

それを気取られたくなくて、私は話題を変えた。

「は、早川さ、その、海外って、やっぱり大変？」

私がそう聞くと、早川は一度グラスに視線を落としてから、ゆっ
くりとうなずいた。

「……正直」

「そっか」

「言葉も違うし、文化も違うし。試合に出られない時期も長かった

っすから」

軽く言っているけれど、きっと簡単じゃなかったんだろぅなということがわかる。

「……そっかぁ。早川頑張ったんだね！」

私が明るくそう言うのと、早川はまた、少しだけ照れたように視線を逸らした。

「……先輩、そういうとこ、変わってない」

「え……？」

意味深にこぼされたその言葉に首をかしげると、早川はグラスの中の氷を揺らしながら、ぽつりと続けた。

「高校のとき、インターハイ前に足やっちゃったことあったじゃないですか」

「……うん、あったね、そんなことも」

「あるとき俺、マジで腐ってて。周りみんな氣い遣って『大丈夫』とか『すぐ治る』とか言ってくれたんすけど、全部うつとうし
いって思っちゃって」

早川は一度言葉を切って、小さく息を吐いた。

「でもあの時、先輩だけが『焦んなくていいよ、早川は早川のペー
スでやんなよ』って言ってくれて……」

「え、私そんなこと言った……?」

「言った。俺は絶対忘れない」

真っ直ぐな目で見つめられて、どきりとする。

「海外で何度も折れそうになったとき、いつもあの言葉思い出し
てたんです」

「……大げさだよ」

「大げさじゃない。今の俺があるのは先輩のおかげ……だから、俺、

あの時のお礼もずっと言いたくて。先輩にまた会いたくなって思ってたんすよ……？」

その声があまりにも真剣で、私は思わず言葉に詰まった。

グラスが空になるたび、早川は「もう一杯いきます？」と聞いてくれる。

断る理由を探す前に、私はいつの間にかうなずいてしまっていた。

「先輩、ほんと顔赤いですよ」

「……うう。ちよっと飲み過ぎたかも」

ふらりと体が揺れて、早川の肩に軽く触れてしまう。

「あ、ごめん……」

「……いいですよ」

そう言って、早川は私の背中にそっと手を添えた。

そのまま離れる気配のないぬくもりに、私もつい身を委ねてしまった。

そして――

そこから先の記憶は、霧がかかったみたいに途切れ途切れだ。

店を出たことも、エレベーターに乗ったことも、ぼんやりと輪郭だけが残っているけれど、詳しい経緯ははっきりとは思いつかない。

次にはっきりと意識が戻ったとき、視界に入ってきたのは見知らぬ天井と――

「……え、ちょ、待って。早川……?」

早川は、ベッドの上で寝転がる私に覆い被さるようにして見下ろしている。

「先輩、起きました？」

「……ここどこ？ ……どうしてここに？」

無理やり連れて来られたということはないだろうけど、知らないホテルに恋人でもない男女でいることに、焦りが生まれる。

「先輩、俺にいったい悩み打ち明けてくれたから……」

「……悩み？」

私は首を傾げる。

「エッチ、全然気持ちよくないって」

「え!？」

その言葉に、私の顔から血の気が引く。一気に酔いが覚めた気分だった。

（わ、私、なんてことを後輩に……!?）

酔っ払っていたとはいえ、そんなことを打ち明けてしまったことに、激しい後悔が襲う。

「……元カレとの話もしてましたよ。不感症って言われて振られちゃったんだって」

早川の声が、さらに追い打ちをかける。

（そんな話まで……!?）

顔が一気に熱くなって、何か言わなきゃと思うのに、喉が詰まっ
てなかなか声が出ない。

「……ご、ごめんね。変なこと言っちゃて……」

いくらなんでも、無防備すぎる。ここまで深く酔って記憶を失う
なんて、自分でも信じられなかった。

「……先輩、お酒弱いんですね」

「うーん……そうでもなかったんだけど……」

ここまで記憶をなくしてしまいうくらいなのは初めてだった。

「ダメですよ。女の人を外でこんなになるまで飲んじや」

「うう。おっしゃるとおりで……」

「……これからは俺の前だけにしてくださいね？」

「うん、わかった……」

早川があまりにも自然にそんなことを言うもんだから——素直に
頷いてしまってから、ふと気づく。

（……ん？ 俺の前だけ……？）

改めて言葉の意味を吟味しているうちに、早川は突然、私の首筋
に顔をうずめた。

「ひゃっ……！」

思わず声が漏れる。

「それじゃあ、そろそろ始めましょっか」

「え、ちょ、始めるってなに？ んんっ……早川ってば！ 私、ぜんぜん何も覚えてないんだってば……！」

勝手に事を進めようとする早川を制止しようとするも、両手をベツドに押さえつけられて身動きができなくなる。

「……でも、先輩が言ったんですよ……？ えっちで感じてみたいって」

（私、酔った勢いでなんてこと話してるの……！）

あまりのショックに呆然としていると、彼の舌が、れろり♡と、いやらしく首筋を這う。

「ちょ、んんッ……はや、かわ……」

私は驚きと恥ずかしさで、声が上がってしまふ。

「先輩は何もしなくていいんで、とりあえず俺に任せて下さい」

ちゅ♡ちゅ♡ぺろぺろ♡

早川の舌遣いに、私は思わず身をよじった。

「い、ひゃ♡……ちよ、やつ、待って！」

私は必死に早川を押しつけようとしたけど、鍛え上げられた彼の身体はビクともしない。

「先輩……」

熱っぽい目で見つめられ、酔ってぼやっとしていた意識がどんどんはつきりしてくる。

「私から誘ったみたいなのにごめん……でも……早川とはやっぱり……無理だよ……」

私は目を伏せ、言葉を絞り出すように言う。

「どうしてっすか？」

「どうしてって、早川は……その、可愛い後輩で……」

「……俺じゃダメ？」

早川が少し眉をひそめ、真剣な表情で問い返す。

「ダメっていうか、私、話したんでしょ？……その……不感症だつて」

「……それがなに？」

「なについて……きっと早川のこと満足させてあげられないよ」

私の元を去って行った恋人たちの顔が思い浮かぶ。

こういう行為は、お互いに気持ちよくなければ、残るのは気まずさだけだ。

恋人でもない早川とそんな関係になって、がっかりされたくない。

早川は私の言葉を聞いて、どこか拗ねたような表情になった。

「……先輩はそんなこと気にしないでいいよ」

「そんなことって……」

「俺が先輩を気持ちよくしたいんです。先輩が感じる姿を見たい。

……それだけ」

そう言いながら、また早川の顔が近づいてくる。

「だめだって、早川……!!」

さすがにこれはまずいと思って、思わず顔を背けると、早川の整った顔に、本気で傷ついたような色が浮かぶ。

(……そんな顔しないでよ)

だって、こんなのおかしい。絶対によくない。それなのに――

「俺とは無理なの……?」

早川の声がひどく切なげに聞こえて、ふつつつと罪悪感のようなものが湧き起こる。

くうん……と、お預けをくらった子犬みたいな顔をしないでほしい。そんな表情見せられると、そのまま流されてしまいそうになる。

そんな私の気の迷いをもちろん早川は見逃してくれるはずもなく

「……俺、先輩のこと抱きたい」

「……！ 早川……」

「俺と一緒にいっぱい気持ちよくなろう？」

耳元で囁かれた瞬間、カッと全身に熱が走った。

（……ずるい、ずるいよお……！）

彼の甘い囁きと、こちらを見下ろす真剣な瞳に、私はもう抵抗する力をすっかり失ってしまった。

「先輩……すき……」

そう言いながら、今度こそ私の唇にキスを落とした。

ちゅ。軽く触れるだけのキス。

付き合っていない相手とするのは初めてだった。

（……好き……か。今だけの好き……なんだよね）

私だって、そう簡単に勘違いはしない。

いまや世界的に人気のバレーボール選手が私なんかには本気のわけがないってちゃんとわかってる。

（まあ、いつか。どうせ早川は休暇が終われば海外に戻るんだし）

世間的にも有名人である人物とこういう関係を持つなんて、これからの人生で二度とないだろう。それならば、一夜の過ちもそれほど悪いものとは思えなくなっていた。

「ん……ふ……」

唇が重なるたび、胸に甘い感覚が広がっていく。早川は何度も角度を変えて、軽いキスを重ねてくる。

（……なんだか、ほんとの恋人みたい）

ちゅ♡ちゅ♡♡

彼の唇は、唇だけじゃなくて、頬や鼻のてっぺん、瞼にも触れてくる。

（ん……なんか、じれったい……）

でも、そのじれったさが、なぜか心地よくて、胸がほっこりと温かくなる。

「早川、キス好きなの？」

思わず聞いてしまうと、早川はにっこり笑って答えた。

「うん、好き。先輩の全部にキスしたい」

「何それ……」

（どうせ、誰にでも言ってるんでしょ……？）

心の中でツツコミを入れる。本気でもないのに、こんな甘い台詞を囁くなんて、とんだ罪な男である。

それでも——早川のキスは、どこまでも優しかった。

（……キスだけなのに……不思議と心が満たされる……）

早川の手が、そっと私の腰に回される。そのぬくもりに、私は目を閉じて、彼のキスに身を任せた。

「……ねえ、先輩、舌出して」

早川の声が、耳元で甘く響く。

「え……？」

私は戸惑いながらも、言われるがままにおずおずと舌を突き出す。

早川は一瞬嬉しそうに目を細め、舌がそれを絡め取った。

れろ♡れろ♡

「……！」

舌先を舌先でゆつくやさしく舐められて、なんだかお腹の辺りが
キュンとなる。

じゅるる♡じゅうう♡♡

「ふぁ、んんッ……」

強く吸われて思わず肩が跳ねる。

「先輩……かわいい♡」

早川は熱に浮かされたようにそう呟くと、さらに激しく舌を絡め
てくる。

れろれろ♡ちゅるちゅる♡じゅるるるる♡♡

（な、なんか……ッ、身体が……熱い……？　お腹のあたりが……

お酒の……せい……？）

「……先輩の舌、甘いね」

「ん……」

「癖になりそう」

そう言って早川は私の舌をカリッと軽く甘噛みした。

「ん……っ♡」

びくん、とまた身体が跳ねてしまう。痛くはないのに、どうしてだか——もどかしいのだ。

早川はそんな反応を楽しむみたいに、激しい舌遣いで私の口内を蹂躪する。

そうして、最後にちゅっと音を立てて唇を離すと、今度は耳たぶを食むようにして舐め上げた。

「え……!？」

れろれろ♡ちゅ、ちゅ♡ぺろぺろ♡

はじめて耳を舐められる感覚に背筋がぞくぞくと震える。

「ひゃ、やあ……♡」

「先輩、耳弱い？」

「わかな……っ、いつ」

（……そんなとこ舐められたことないよ）

これまでの恋人との情事が頭の中に蘇る。

——不感症じゃないの？

そんな、心ない言葉まで。

「……せーんぱい、誰のこと考えてんの？」

「え……？」

急に低い声を耳元に吹き込まれ、我にかえる。

「今、他の男のこと考えてたでしょ」

「そ、そんなこと……」

ない。と言いかけて、私は口をつぐんだ。

「今は、俺のことだけ考えてよ」

低い声で囁かれ、私は咄嗟に早川と距離を取ろうとしてしまう。けれど、早川の大きな手が逃さないとばかりに私の後頭部を固定する。

もう一度、早川の舌が耳の中に入ってくる感覚に思わず身をよじったけれど、強く押さえられていて逃げられない。そのままぴちゃぴちゃと音を立てて舐められる。その音が直接頭の中に響いてきて、頭がおかしくなりそうだ。

「……っ……や……あ」

「先輩、マジで可愛い」

早川はそう囁くと、今度は反対側の耳を舐め始めた。

ぴちゃ♡ぴちゃ♡

「先輩の耳、ちっこくて食べたくなる」

「あ……ッ、ん……」

はむ、はむ♡ぬるる♡

舐める代わりに耳たぶをやさしく食まれたかと思うと、またぬるぬると耳の縁に舌を這わされて、思わず吐息が漏れた。

(なに……これ……?)

「先輩、声我慢しないで」

早川は食べたいと言った言葉どおり、執拗に耳を舐めたり、やさしくかじったりしてくる。

こしよばいのとはまた違う、腰の奥が甘く痺れるような感覚に私は漏れ出る声が止められなかった。

「……っふ……あ……♡」

「先輩……不感症なんて嘘でしょ？」

耳元でそう囁かれて、身体の芯から熱くなる。それと同時にどうしようもなく恥ずかしさが込み上げる。

「ち、が……っ」

「だって先輩、こんなに感じてる」

そう言った早川の手が太ももをなぞる。ツツツと走っていく早川の指先の向かう先は――

「だめっ」

思わず足を閉じようとしたけれど、早川の力には敵わなくて。そのまま私の足の付け根へと伸びていく。

下着の上から一番敏感な部分を撫でられて、私は思わず身体を震わせた。

くちゅり♡くちゅり♡

早川の指の動きに合わせてはしたない水音が響いた。

（そんな……私……）

「……ほーら、こんなに濡れてるよ？」

その言葉に顔から火が出そうになるくらい熱くなる。

早川はそのまま何度か擦りあげるように指を動かしたあと、指を離した。

「先輩、まだキスしかしてないのに……」

早川の声が、耳元で甘く響く。

「……期待してるの？」

（どうしよう……私、どうしちゃったの……？ 恥ずかしいよ……）

私は顔を赤らめながら、必死に言い訳しようとする。

「う、嘘じゃなくて、私……」

「こんなに感じやすいのに？」

彼の手が、下着の中に滑り込んでくる。

「ひゃっ……!!」

直に触れられた感覚に、思わず腰が引けてしまう。

(やだ……そこ、触られるの……ヤバい気がする……)

早川は私の腰をぐいっと片腕でホールドして、逃がさないように固定する。

彼の指が、ぬるつと敏感な部分をやさしくゆつくりと撫でる。

「……っふ」

ぬちゅ♡ぬちゅ♡

「ん……」

「ほら、どんどん溢れてくるよ?」

ぬちゅ♡ぬちゅ♡ぬちゅ♡ぬちゅ♡

彼の指が、敏感な箇所を塗りたくるように音を立てながら動く。

（やだ……こんな音、恥ずかしすぎ……!!）

水音が室内に響き渡って、頭がおかしくなりそうだった。

「だって、ほんとに、今まで、こういうの苦手で……」

「でも先輩、こうしてあげるとめちゃうくちゃ気持ちよさそうだよ？」
くちゅくちゅ♡ぴちゃぴちゃ♡

早川の指の動きが少しだけ速くなる。

「っふ……アあ♡」

思わず漏れてしまった声に、慌てて口をつぐむと、早川はまた耳元で囁いた。

「だーかーらー、声我慢しちゃだめだって」

早川の声が、再び耳元で囁かれる。

そのまま、彼の唇が耳たぶを甘噛みする。

「ひゃ……」